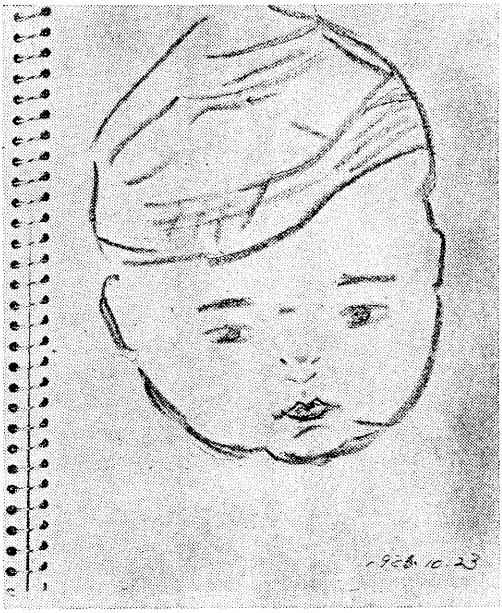
—私の見た中国—

子どもたち



近藤伊津子

昨秋・中国大陸の旅をした。何よりも中国の子どもたちにたくさん触れたいものと願いながら、夜の北京空港におりたった。

最近の中国では、一夫婦一子の政策がかなり徹底され都市部に住む人々は殆ど一子であるという。

地球上の全人類の四分の一かを占めるという中国の人口の膨脹を抑制していくことは、この国において重大な課題であるのだ。

それが実行されて数年経ち、その一期生の子どもたち

が学齢を今年迎えるという。

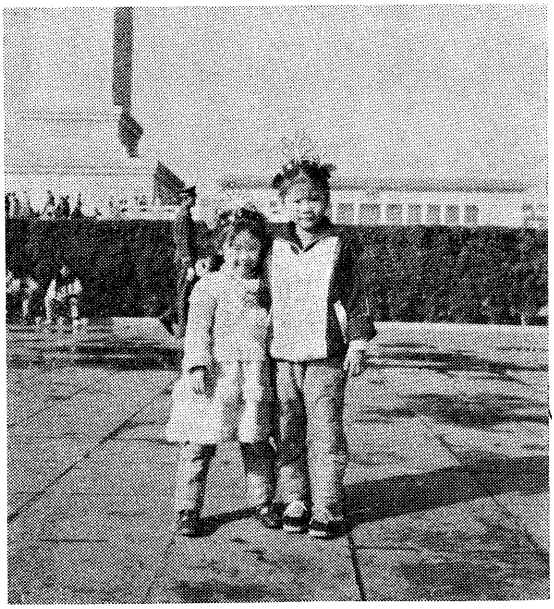
日本で報道されるこの事実は、私の中にある中国の文化としての子どものありようが、イメージしがたく、もどかしく思われた。

しかし、今回の旅は、この私の思いを探らせてくれるものではなさそうであることは、予想された。風物を見る凡庸な赤ゲットの一人にすぎないものであるから。

到着翌日の北京の天安門広場は、前日の雨の小降りで、足元の敷石が湿っていたが、音がどこまでも響きわたるような透明感のある秋天であった。南北800m、東西500mもあるこの広場は、おびただしい数の老若男女が潮の流れが幾通りも同時にまきおこっているように動き、壮観である。

その一方、のびやかに散策する人々もいた。幼い子をつれた父・母、又は祖父母と思われる人々。

日溜りの中に腰をおろした二組の母子づれに声をかけた。五才と三才の女児はどちらかが誕生日であるという



（写真①）

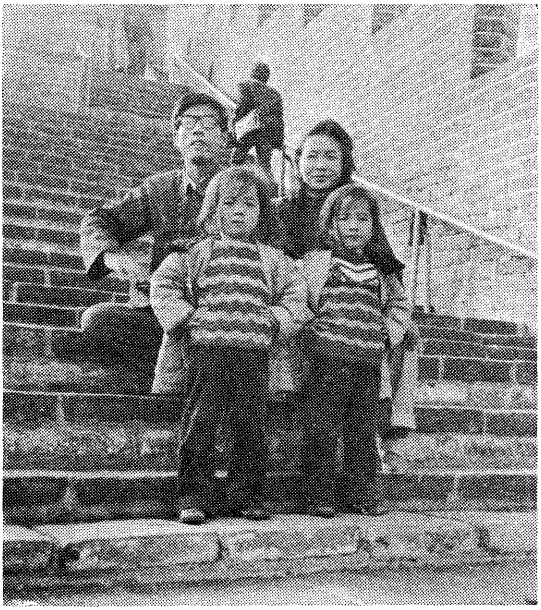
（写真①）。二人とも赤い冠の被りものをしている。冠には剪り紙のような蝶蝶が華やかに飾りつけられ、一見京劇のそれのようだ。綿の入ったスラックスとジャンパー、一人はピンク色の手編み毛糸のワンピースをスラックスの上に着ていた。赤い紐結びのズック靴と赤いビニール靴、これは外出の装いか。この二人は、カメラをむけると、さっとポーズしてくれた。

見わたすと、広場の中ほどには、このような幼い子づれが幾組も、まもなくの極寒の前の陽光を惜しむようにたむろしている。

解放軍兵士の軍服を模した服の男児が目立ったが、子ども達の服装は非常にカラフルであり、女児の毛髪にはリボンが飾られていることが多い。

しかし、兄弟、姉妹と思われる子どもを連れた人が、視野に入らないことは、奇妙で、私を不安にした。

北京の北西にある八達嶺の長城に登った。途中、古代の長城の塁壁の残骸が点在しているのを見た。北方民族



（写真②）

匈奴の侵入を防ぐために紀元前の昔から、幾度も修築してきたという。うねうねと続く長壁の階段のほんの触りの部分を歩いて登った。おもしろいことに、階段の一つ一つの高さが不ぞろいなのである。敵を欺くためのものか。その階段を、幾たりも、この国の人々が家族づれで楽しんでいた。

足元の覚束無い老母の両手をとり腰をかがめて、ゆっくりと登る壮年の息子、この光景は、まさに〝中国である〟と感じた。職場の仲間とおぼしき紺の人民服の中年の男たちのグループは、壁に背もたれ、悠然としている。若い二人連れ、子づれの一家……皆、実にのどかに、この辺境の少し薄い空気を吸い込んでいた。

週日のためか、学齢の子どもの姿はなく、幼い子どもたちが目立った。

亜麻色の細い毛髪を肩までたらした女児二人、緑と黄の波のある横縞のセーターが自慢らしく、ベージュの半コートを両手でかきわけ、腰に手を当て、片方の足は上の階段にのせ、ぴたりと横に並び、父親のカメラに構えていた(写真②)。思わず声をかけてしまった。北京から来たという四人家族の父親はしきりと英語で話しかけて来た。時間が全くなく、残念であった。

天安門広場、そしてここでの子どもたちの表情は繊細で明るい。日本の子どもたちにない透明さを感じたのは何故だろうか。親たちの身形は子どもに比べ、質素であるが、その身辺に落着きを漂わせているのを感じた。

北京を離れ洛陽の近くの龍門石仏を見物した折、子どもの姿はなかったが、七～八才の男児が大仏の前で写真屋に記念写真をとってもらっていた。長ズボンの裾が片方、ゴム長靴にひっかかり、めくれ上って、ベルトの代りの赤い紐が上着の下に見えている。顎を引き真剣そのもの、同じく赤ゲットに違いない。うれしくなって、私も中国人の写真屋に一枚とってもらった。丁寧に中国式ポーズをつけてくれた。

洛陽から西安まで八時間余りの汽車旅をした。農村地帯に入ると、山の壁には、黄土高原独特の横穴式住居、

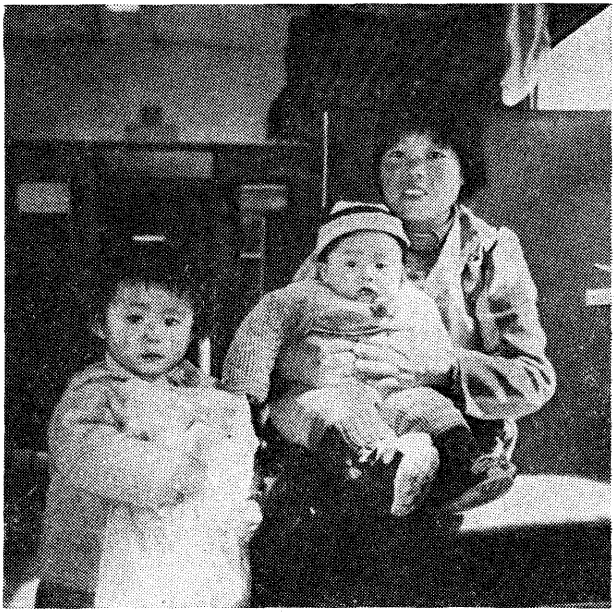
窟洞(ヤオトン)が見えて来た。乾燥地帯の山西省一帯では、いつとも知れぬ昔から人びとは無数の穴を掘り大地の中でくらして来た。夏、涼しく、冬は暖いという。中には炕(カン)（オンドル）があるという。

夥しい玉蜀黍が積まれ、あるいは束ねて木につるされ、唐辛子が連にして軒に干されている。

黄と赤の鮮やかな前庭では、子どもたちの姿が、ちらちらと見えた。広々とした耕地はよく手入れされており、真中あたりが、盛り上って小山となっているのは墓地か。一度は、その小山に白衣、白帽の人々が白布の旗をもった葬列を見た。

この地の人々は大地に生れ、そこに住み、そして、大地に還っていく。大昔からの営みを、車窓から私は垣間見たわけである。

実は私は、息子から中国の汽車時刻表を土産に頼まれ、北京以来、ガイドに相談してみたが、いずれのガイド氏も「ない」あるいは、一度駅員にたずねてみてくれ



（写真③）

て「ない」とまことにつれない。この汽車に乗って、すぐに車掌にたずねてみた。やはり「ない」という答えであったが、暫くして「ある」という。もう一人の担当車掌が業務用の自分の鞄から取り出してくれた。掌にのるほどの小さいものであるが、見れば値段も印刷されていた。それをきっかけに、車掌の詰所になっているコンパートメントに誘われ、四人の男女の車掌と小一時間も語らった。

ここで、葬列のことも、炕のこともきかされた。つたない中国語と筆談でも通じ、同じ漢字を持つことがしみじみと有難かった。

一体にガイドは若く、大学の日本語科を卒業しており、この国では人も羨む職種であると聞いたが、日本語を話すというだけで、ほとんど自国の文化も知らないように見うけられた。多忙すぎて、学習の時間がないとも嘆いていたが、たずねても「知らない」という返事が多く、情けない思いをした。

それらガイド氏より年嵩の車掌たちの方が自分の生活を語ることでは秀れ、はるかに興味深くあった。車窓の景色についても、たずねると知る限り、教えてくれた。

食堂車への往復に硬席の車輛を通った。文字通り、いかにも硬そうな座席である。いわゆる三等車である。五割方の乗客で、横になっている人もいた。若い母親が赤ん坊を抱き、ピーナツの袋をかかえた二才ほどの男児を連れていた(写真③)。前の席では父親が寝ころび、小声で遊んでいた。斜め前の席に座り、外の景色のスケッチをしているとその子がよって来て見る。どこからか、チェックの上着をしゃれこんだ若者が前にやって来て、北京から西安に遊びに行くのだと、実に楽しげに話しかけて来た。彼は日本と中国は互に学びあわねばならない、と私の手帳に書いてくれた。もっともなことである。

「可似描您孫子?」と若い母親にたずね、赤ん坊をスケッチさせてもらった。四ヶ月の头华(トウファ)坊やは、毛糸の帽子、毛糸のつなぎもぎっちりと厚く、足は布で幾重にもくるみ、宝宝布靴(虎を刺繍した赤い幼児布靴)が大きい。父親はいつのまにか隣りの席に移り知らん顔。母親

は赤ん坊の衣類のあちこちを直しととのえる。

スケッチの途中、头华坊やが力みはじめた。股間は開けたまゝの衣である。母親は、黒色のハンカチ大のごわごわした綿布の端をとり出し、肛門に当てがい、右手で、それを少しずつ内まきにしている。排泄物をつつみながら、肛門を拭いているのだろうか。

初めて二人の子持ちを発見して、この若い母親なら、まだ何人でも産み育てられるだろうにと勝手に思ってしまった。農村では、制限があまり利いていないようであると、後日聞いたことであるが。

西安はかつて世界最大の都であった、古都、長安である。シルクロードへの門が城壁の西にある街である。西安駅前は、黒く煤けた軒の低い喰物屋が並び、頭に黒い布を巻きつけた人々がいた。一メートルもありそうな穿山甲(アルマジロ)のぶらさがっている店があった。

翌日、陝西省博物館見学のあと、宿舎にもどる一行と南門で別れ、ひとり夕刻の城内の人々の賑わいの街を歩いた。

(写真④)

中国の街は、いずこも治安が良く、昼夜の一人歩きも、一度も不安を感じさせないところであるが、ほとんどの日本人は出歩かないようだ。

私の前を、やっと歩き始めたような男児に大人の上着を羽織らせ、レインコートにショルダーの母親が、子どもに話しかけながら歩いていた(写真④)。ちょっと先に出て、挨拶して写真をとらせてもらった。人垣の小さな本屋に寄り表に出ると、又、その母子に出逢った。手を軽くふって別れ、もう一軒の本屋を覗いて出たところで、またもや、再会。母親はさっと私の腕をとり、お茶を飲みに寄りませんか、といって、すぐに路地に折れ込み、まもなく、白の簾のかかる長屋の一軒に着いた。路地は狭く、一・五メートルもあろうか。胡同(フートン)という小路であろうか。入口一ぱいの真白の簾をよけて木の扉を開け入った土間は4.5畳ほどの居間であった。ゆったりした肘掛椅子が二つ並び、簡素な机が壁側にあった。上には小さなカラーテレビと電話器。土壁には小さな模様の紙が貼ってあり、やゝ上の方に緑色の小さなランプがついた。次の部屋との仕切りには戸がなく、そこは三~四畳位の土間で、大きな寝台がほとんどを占めている。その右手に半間幅の台所、明り窓には白い紙が貼られ、裸電球が一つ下っていた。台所の外側が胡同(フートン)である。台所にはプロパンガスのボンベ、ガスコンロ二つ、それには、薬罐と中華鍋がのっていた。他には家具らしいものは見当らない。

俊坊やの母親はすぐに湯を沸し、お茶とミカンを勧めて、さつま芋を洗いはじめた。一才四ヶ月の俊坊やは母親にまとわりつく。夫は六時に帰ると言いながら、夫の写真を見せて、中級法務院に勤めていること、自分は緑のランプを作る工人であることを話してくれた。夕食を一緒にといわれたが、宿舎での約束があり残念ながら辞退した。やがてご主人が帰って来て、私はまもなく辞去。バス停まで送ってくれるという好意に甘えて、ゆっくり表通りに出た。丁度出たところに、電球屋があり、自分の作ったものであると話してくれた。

かつて長安の都が、全世界の中心をなす花の都であっ

た頃に、こうした城壁に沿った民家や胡洞(フートン)は出来上っていたであろう。胡洞(フートン)に密集し連なった煉瓦と土壁の家々は、思いもかけぬ昔からのものではなかろうか。

李方は、見知らぬ旅人の腕をとり案内した。その心意気と優雅さは、何に例えられようか。

若い女たちの足の運びの美しさにはとうに気付いていたが、私が客となり、茶を勧められ、改めてその手足の動きの美しさには息を呑む思いであった。

茶を運び椀を差し出す時、その腕を左右にゆるやかにひねり、そっとすべるように出す。そして、夫の周建华に別れを告げ、白い簾の前で写真をとったが、李方は、私の両手を、そっと取って立ち、少し俯いている。

私は仄暗い中で、李方の横顔を見ながら、長城での老婆と息子の光景を重ねていた。私は丁度、李方の母親にふさわしい年令である。

今の中国の子どもたち、女たちの極く自然な立居振舞の中に、京劇・昆劇の動きと重なるものを、幾度も見たと思った。

古典劇の動きは、古来、その国独特の動きを強調したものではなかろうか。

天安門広場の蝶蝶の冠の少女たち、長城での双生児と思われる少女たちの構え、老母を誘(いざな)う息子、そして、長安の李方……。

何の衒もなく持って生れた自然の構えであり、飾りつけであり、仕種であり、伝統である。

西安駅前の賑いと違い、ゆったりと落着きのある私の歩いた南大街は、〃かつて都であった長安〃というより、はるかに今も、この西安こそ老成した中国を感じさせるところである。

都であったころ、ここには金髪碧眼の美女が花のかんばせで客を招く酒場もあったという。

国中の優れた人々が、集まり、散ったであろう。知識階級——優れた感性の詩人たちが、爛熟した文化の中で、しのびよる頽廃の影に気づいたのであろうか。古代の中国の詩人の中ではめずらしく内面的な個人感情をう

たったものがある。

長安に男児あり
二十にして心已に朽ちたり

（李賀「陳商に贈る」より）

さて、李方に送られ大通りに出ると、西安の街は月が城壁の上まで昇ったところであった。人々は行きかい、夕刻よりはるかに喧噪としている。黄土の砂塵で月はおぼろにかすみ、あたりは羊の焼く煙がにおった。

満員のバスにしがみつくように乗り込み、宿舎の近くで降りた。

翌日小さな飛行機で西安を後にした。うねうねとのたうつ大河を見ながら、成都に向った。

成都は、まことに古い都である。街の南に流れる川にかかる錦江橋に佇むと、この国の民話『錦の中の仙女』(注)を彷彿とさせ、その他の民話の登場人物が、歩き、あるいは話しかけてくるのを感じた。

竹の先に、大蒜を束ね、肩にかついで売り歩いている老人は裾の長い唐衫を着ている。人民服の人々に交わり、西の都であることを告げている。

諸葛孔明、劉備の祀られている武侯祠では、少数民族の子ども、女たちがいた。

内庭の長椅子で西瓜の種を食みながら、スケッチをはじめると、その中の母子づれが近よって来て、束ねて垂らしていた私の毛髪を触わり、赤い布と三つ編みにした自分の毛髪を見せた。微笑み返し、西瓜の種の交換。

娘をつれたその母親は、白いシャツの上に毛糸の赤チョッキ、藍色の厚い綿入れの大きいスカートを裾長くはいていた。スカートは丹前を後むきに巻きつけたかのように見える。そして、そのスカートの上から、黒色の風呂敷つつみを腰に巻いている。

チベットの方から来たのであろうか。私の話しかけに微笑みだけで、知る縁もない。

連れの女児二人は、自分たちの名前を書いて見せてく

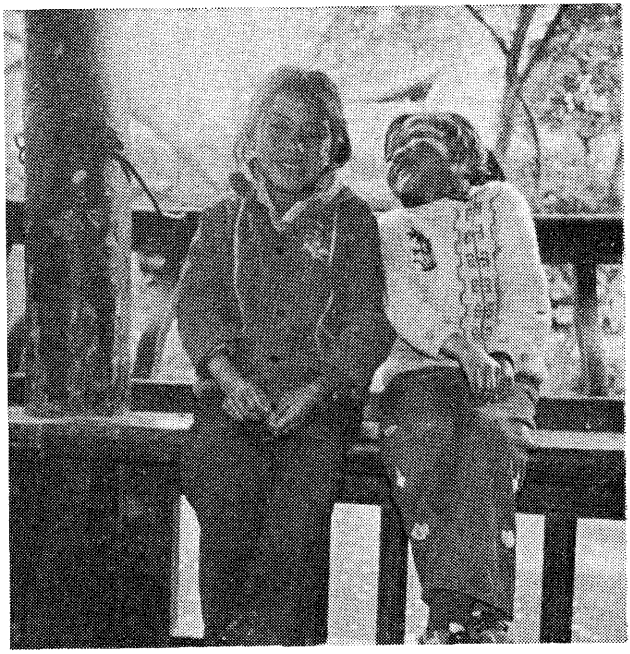
れた。子どもたちはありふれた装いをしていた。

成都の宿舎の近くの自由市場には、貸本屋があり、時間料金で借りると、その近くにしゃがみ込み、読む。本には薄茶の厚めの紙が被せてあり、背表紙に墨で書名が書かれていた。数人の少年が読み耽っていた。

二日目の夜、宿舎を抜け出し、夜店を歩いた。若者に最も人気のある本を、と求めると『紅楼夢』と『西遊記』、そして現代作家のものを数冊並べた。

わずかばかりの子どもの絵本を手にとっていると、背負われるには少し大きい児が、母の背で本をせびっている。母親はその本を手にとり、そしてもどした。『阿里巴巴和四十大盗』(価三角九分)、『説明的木娃』(二角四分) いずれも十二、三頁の薄い絵本である。なおもせびる子どもを宥めながら行ってしまったが、高いのだろうか。物の値段は旅人にはわかりにくいことであるが。

上海のデパートの玩具売場で見た買物ぶりは、驚くほ



(写真⑤)

どに慎重であった。丁寧にぜんまいを巻いてみて、動かしてみて、小さなブリキの自動車を買った。

一人だけの子どもに与えるものを、絵本にしろ、玩具にしろ、丁寧に選び、懐と相談する。それは貧しい故というものでなく、悠長とした性質と、合理性を見たと思った。

成都二日目の早朝、小雨の宿舎の前の大通りは、自転車の荷台に竹製の台をつけ、子どもを立たせ紐むすびした母子、父子が大群をなして走る。

父母とも仕事を持つことが当り前のこの社会では、職場で保育が確保されているという。職場の同じビルに保育所があるところも見た。あるいは祖父母に預けるとも聞いた。

自転車の大群の過ぎたあとは、宿舎の前の広場に、年よりたちが幼児をつれ、ゆったりと相手をして慈しんでいる。

この朝、私は、中国でのたった一人の子どもを大切に育てている親たちの姿を、そしてその子どもたちを、不安なく観ていることに気付いた。

この後、上海、蘇州をまわり帰国したが、その思いはますます深まった。

◇

嬌女詩（嬌女の詩）

吾が家に嬌女有り
皎皎として頗る白皙なり。
小字を紈素と為い、
口齒　自ら清歴なり。
鬢髮は広額を覆い
双耳は連璧に似たり。
明朝　梳台を弄して、
黛眉は掃迹に類す。
濃朱を丹唇に衍りて、
黄吻は爛漫として赤し。
嬌語　連瑣の若く、

忿速しては乃ち明懂す。
筆を握っては彤管を利とし、
篆刻しては未だ益を期せず。
書を執っては綈素を愛し、
誦習しては獲る所を矜る。

左思

この詩人は西晋時代（二六五～三一六年）の華美を競う形式重視の時代の例外的作風をもつとされている。この詩は俗語をふんだんに用い、諧謔味ゆたかに、子ども自慢をしたものである。紈素と恵芳なる幼い姉妹の日々のくらしのありようを、慈しみをこめてユーモアに現わしている。

この先、二十行の詩が続く。左思は身分低く、当時の人からは軽んぜられたという。当時の身分のない家の子どもの日常生活をリアルに描いたものとして、又、子どもに注がれる、親の視線をも探ることが出来る資料ではなかろうか。

わが娘は、透きとおるほど色白で、歯ぎれよくおしゃべりをし、広い額に、白玉を連ねたような耳をもつ、と手放しでその美しさを自慢する。化粧台をいじくりまわし、筆をとって金釘流で書き、習いおぼえたところを誦じている、と賢さの片鱗を披露する。

姉娘は、顔立ちは絵にかいたように美しい。二人の娘は庭をかけめぐり遊び、赤い花がほしくて、雨風の中を何べんでも取りに行く。ぬれた靴が山のようにたまる。鉦や缶の楽器の音がすると、とび出してそこらを歩きまわる。……こんなふうに子どもたちは好きなように振まってすごしている……とある。

責子（子を責む）

白髪は両鬢を被い、
肌膚復た実ならず。
五男児有りと雖も、
総べて紙筆を好まず。

阿舒は已に二八なるに、
懶惰なること故に匹無し。
阿宣は行々志学なるも、
而も文術を愛せず。
雍と端とは年十三なるも、
六と七とを識らず。
通子は九歳に垂んとするも、
但だ梨と栗とを覓むるのみ。
天運　苟くも此くの如くんば、
且く杯中の物を進めん。

陶淵明

五人の息子たちを、どれもこれも困った子どもたちで、と父親は嘆く言葉に慈愛を込め、軽妙にぐちる。

陶淵明は東晋（三一六～四二〇年）から宋にかけての詩人である。この詩人も、華麗を追う時代にあって官吏を辞し田園に帰し、くわを取り、平淡・自然の中で生涯を送った。

五人も息子がいるのに、どの子も、このようでは出世しそうもないと、この父親は思ったであろうか。いえ、自由人としてくらしている父親は、息子たちを、そのあり様をそのまゝ、受けとめて、慈しんでいるのである。しかも、無類の怠けものと思い切り言ってみたり、十五才で学問に志さねばならないのにどうも好きでないようだ、六と七の区別がつかない、梨と栗だのをねだるだけであると、頑是ない息子たちを、おもしろがっているようにさえ思われる。

二つの古代の詩を、繙いでみた。この二つの詩の生れた時代は十五～十七世紀以前である。孔子、孟子の儒教は既に在り、老子、荘子の道教が流行した時でもあった。決して、平穏な時代ではなく、戦乱や天災は地を蔽っていた時代である。

二人の詩人は世に入れられず、へりくだらず、貧をよしとしくらした。

二つの詩は、古代の中国の人々の子そだてのありよう

を示しているものでなかろうか。

おとなが子そだてをおもしろがる、即ち、その遊戯性を大切にしたということ、その子そだての思想は、あらゆる時代の試練を経て、今も、中国に息づいているのでないか。

老荘の宇宙哲学と、孔孟の実践哲学を同時に生んだ、おどろくべき思考の沃野は、変革があったとは言え、それだけの根があるはずである。

『紅楼夢』は宝玉少年をとりまく美女の物語であるが、これが不朽の悲劇であるのは、善美の少年少女がいつとはなしに消え去ってしまう可憐哀感ばかりでなく、その中に、辣婦鳳姐や、強女尤三姐の言動をふくみ、人間臭のある深みとひろがりが加えられているからである。

この小説の社会のとらえようは、全体的に空間的に、四方八方にむかって手をのばす態度である。これは、又、二大思想の一致するところのもので、これが中国の伝統となり、「紅楼夢」を生み出した。

それ故にこそ、幾たびの変革を経た今の中国で、確実に一層広く読み継がれるのである。

二つの古代詩、そして今も広く愛読される『紅楼夢』を通して、飛躍した表現であるが、〃悠久の民〃として息づく中国の人びとは、〃一人だけの子どもを育てる〃という現実を、その歴史の中の瞬時のできごととして、呑みこみ、生きるのであろうと思われたのである。

（かっこう文庫主宰）

（参考資料）
「中国名詩選」松枝茂夫編　岩波書店
「荘子」　福永光司著　中公新書
（注）
「錦の中の仙女」近藤伊津子再話・未刊